

## ビワ花房に対する木毛被覆について

原田 和・児島道弘

(鹿児島農業改良普及所・鹿児島県技術普及課)

HARADA, K., and KOZIMA, M.

On the Cluster wrapping upon the loquat by wood wools.

桜島のビワは他の産地にさきがけて出荷されている。しかし年による豊凶の差が大きく、寒害の年には平年の30%ぐらいしか収穫できず生産の安定が望まれている。一方、東桜島の高免地方には古くからビワの花房に木毛を被覆して寒害防止の効果をあげていた。この農家の開発した技術を現地の展示場で技術体系を確立するために、1968年から2ヶ年間調査検討したのでその結果を報告する。

### 調査方法

西桜島村小池の2農家のほ場で、茂木ビワ15年生と25年生を用い1区1樹の3連制にして、開花盛期後の12月下旬から3月までビワ1花房あたり25gの木毛を被覆し、幼果の寒害防止効果と品質および熟期などについて調査した。

### 結果の概要

1. 木毛の被覆は-3℃くらいの低温に対して寒害の防止効果がみられ、無処理区は35%凍害果の発生があったのに対し、木毛被覆区は2.8%に減少した。

2. 木毛被覆による果実の果形は、寒害の有無と関係がみられ寒害の年は横径が小さく、寒害のない年は縦径に小さい傾向がみられた。また、1果平均重は、寒害の有無と関係なく木毛被覆区が4~5%小さい傾向であった。これを階級別にみると木毛被覆区は大果割合が低かった。

3. 果実の外観では木毛被覆区が毛じが残り、果色に光沢があり美麗で傷果が少なく品質がすぐれていた。また、果実の内容では糖、酸とも大差がみられなかった。

4. 木毛被覆果実は含核数が少なくなる傾向がみられ、含核数と果重の関係には正の相関があることが判明した。しかし、含核数と果肉歩合の間には一定の傾向はみられなかった。

5. 木毛被覆と熟期の関係については、寒害のな

い年には大差はみられなかったが、寒害の年には前期出荷の割合が無処理区に比べて10%程度促進される傾向がみられた。

6. 木毛被覆の時期を開花前、開花盛後、開花終期の3時期に分けて調査した結果、時期別では開花終期が果重の重い傾向がみられ、含核数も無処理区と大差のないことがわかった。

第1表 幼果の寒害発生状況

区 別	調査 房数	被害 房数	調査 果数	被害 果数	被害率%	
					果房	果実
木毛被覆区	35	3	146	4	8.6	2.8
無処理区	35	19.7	163	58	50.2	35.4

(1968)

第2表 果実の階級別割合と前期出荷割合

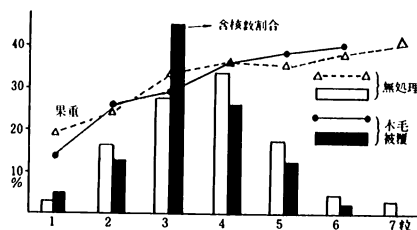
区 別	果実の階級別割合 %					前期出荷 割合 % 5月11日~ 5月9日
	L L	L	M	S	S S	
木毛被覆区	21.2	53.8	24.0	0	1.0	48.9
無処理区	37.9	44.8	10.5	5.6	1.2	38.1

(1968)

第3表 木毛の被覆時期と果実の特性

処理時期	果重	横径	縦径	糖度	含核数
開花前被覆	43.3 <sup>g</sup>	40.1 <sup>mm</sup>	47.4 <sup>mm</sup>	8.8	3.95
開花盛被覆	40.1	38.5	46.9	8.8	3.67
開花終被覆	44.9	40.6	47.9	9.3	4.00

(1969)



(1969)